

まえがき

蛇という生きものは、お金かねを好むようです。

それが証拠に、大蛇が、荒れ屋敷の隠し財産や洞窟の秘宝を守護しているという伝説は、世界中、いたるところに残っています。

また、古今東西を問わず、「お金かねなんか大嫌い」という女性は、めったに居りません。

ところで、日本の文化史や芸能史をみていて面白いのは、

「金かね」を「鐘」と言い換えてみても、そのあたりの事情があまり変わらないという点です。

「蛇・女・鐘」という、ちょっと唐突に思える三つのお題をもとに、

どんな斬が飛び出しますやら、さあて、お立ち合い！

1
鐘という宇宙



(1) 日本文化は鐘づくし

鐘と聞いて、何を連想されますか。

ちよつと古風な御方おかたなら、いろは歌留多にもある「提灯ちようちんに釣鐘つりがね」ということわざでしょうか。

提灯と釣鐘は、形こそ似ていますが、その重量たるや格段の違いがあります。

そこで、「外見はともかくとして、中身が似ても似つかないこと」「ふたつのことが全く釣りあわないこと」のたとえに用いられるのが、この句です。「月とすつぽん」や「雪と炭」も同じような意味で使われます。

井原西鶴の『西鶴織留さいかくおりどめ』の目録一の三には、

挑灯ちようちん（注）西鶴は、提灯ではなく挑灯と表記）に

釣鐘なぐしやうかけあはぬ事すれば、

内証ないしやうの火の消ゆるにほどちかし

（身分不相応な縁組みをすると、早晚、暮らし向きが立ちゆかなくなるものです）

2
鐘と蛇と水のトライアングル



(1) 沈鐘伝説とは

① 越前国と筑前国が二大名所

三井寺や尾上神社の伝説にも窺^{うかが}える通り、鐘と蛇とは深いつながりがあります。そして、両者を取り持つ大事な要素が、水です。

蛇は水辺に棲むことも多いので、「蛇ー水」の関係の深さは容易に想像がつくでしょう。しかし、「鐘ー水」となると・・・。

鐘楼に架かる鐘しか思い浮かばない御方^{おかた}には奇異に感じられるでしょうが、鐘と水とは、実のところ、結構、縁が深いのです。

その証左が、各地に残る「沈鐘伝説^{ちんしょう}」です。故^{ゆえ}あって、池沼、川、海などの水底^{みなぞこ}へ沈んだ鐘がさまざまな怪異を引き起こすというもの。

鐘が沈んだ場所は、多くの場合、「鐘ノ岬^{かねのみさき}」、「鐘ヶ岬^{かねがみさき}」、「鐘崎^{かねざき}」、「鐘ヶ淵^{かねがふち}」など、鐘にちなんだ地名で呼ばれます（鐘が開口部を上にして逆さまに沈んだ場合、その姿が釜に見立てられ、「鐘ヶ淵」ではなく「釜ヶ淵」と呼ばれることもあります）。

3

鐘に恨みはかずかずござる



(1) 追う女、逃げる男

一夜の宿を供した旅の男に懸想した女。

男のかりそめの言葉を信じ、添い遂げることを夢見て待つが、やがて男の裏切りを知り、憤怒のあまり、その身は大蛇は化して、男のあとを追う。驚いた男は、寺へ逃げ込み、鐘の中へ匿われるが、大蛇は曠患の炎毒で以て、男を鐘もろとも焼きつくす……。

これが、世に名高い道成寺（和歌山県日高郡日高川町鐘巻）伝説、安珍清姫伝説の骨子です。鐘に恨みはかずかずござる。

さっそく、この伝説の系譜をたどってみましょう。

① 『大日本国法華経験記』の「寡婦」

仏典は、女人を罪業深き身と蔑み、僧や信者に対して、これを退けるように強く勧奨しています。例えば、

4 芸能にみる道成寺伝説



(1) 文楽『日高川入相花王』の激流

ひだかがわいりあいざくら

道成寺伝説は、男を想う女の妄執という普遍的なテーマを含み、しかも日本人の心性に深く喰いこんでいる鐘をモチーフにしているため、芸能の世界でさまざまな演目を生みだし、「道成寺もの」と呼ばれる一大ジャンルを形成するに至りました。

道成寺もののうち、「僧逃走系（逃げる安珍&追う清姫）」の代表作と言われるのが、宝暦九（一七五九）年に大坂竹本座で初演された『日高川入相花王』の四段目「日高川渡し場の段」です。

（なお、『日高川入相花王』の先行作は、「清姫」という名が初めて登場したことでも知られる浄瑠璃『道成寺現在蛇鱗』（寛保二（一七四二）年大坂豊竹座初演）です。）

眼前の日高川に遮られて男を追いかけられない清姫の懊悩、妄執による蛇体への変身、そして壮絶な川渡りのくだりを劇的に表現しています。

一足先に対岸へ船で渡った安珍は、渡し守の船頭に金を渡し、後から自分を追って清姫という娘が来ても、決して対岸へ渡ししてくれるなど頼みます。

追いつめられた男がいかにもやりそうな手口で、男の身勝手さや姑息さが観客に強く印象づけられます。

5

無間の鐘の呪縛^{むげん}



女。

愛欲に狂い、嫉妬の炎ほむらに身を焦こがし、蛇身となる女。

その狂熱は、中にいる男もろとも、鐘を焼きつくします。

そして、みずからも火焰かえんの内に果て、あるいは池沼ちしよや淵に身を沈めて、落命してしまふのです。

しかし、それですべてが終わったわけではありません。

彼女は、遠からず転生します。

無垢な、別の女として。

彼女は、新しい人生において、またしても恋を知り、愛におほれることでしよう。

裏切られ、傷つき、恨み、ついには蛇となるのでしよう。

もちろん、その蛇が向かう先には、鐘があるのです。

女・蛇・鐘、女・蛇・鐘、女・蛇・鐘……

神仏の加護も及ばない、恐ろしい三角形。

女・蛇・鐘の三者の循環とその連鎖は、鐘の響きに促されながら、永遠に続いてゆくことでしよう。

なんとという酷むじさ。

なんとという哀しさ。

なんとという美しさ。

〈完〉